市史通信

【目次】
●展示会
　レンズがとらえた震災復興
●横浜に暮らした
　占領軍高級将校たち
●開港百年と作詞家星野哲郎
●写真で見る昭和の横浜⑦
　震災から命を助けた池
●開架資料紹介
　横浜市事務報告書
●市史資料室たより

前川写真館から寄贈されたガラス乾板
木箱の脇に墨書で「大横浜」との文字が見える。

横浜市史資料室所蔵「前川淨二家資料」

第17号
【発行日】2013年7月9日
【編集・発行】横浜市史資料室
〒220-0032
横浜市西区老松町1番地
横浜市中央図書館・地下1階
【電話】045-251-3260
【FAX】045-251-7321
【E-mail】
so-sisiriyou@city.yokohama.jp
【ホームページ】
http://www.city.yokohama.lg.jp/somu/org/housei/sisi/

レンズがとらえた震災復興

一九二三（大正一二）年九月一日に発生した関東大震災により、横浜では死者・行方不明者約二六〇〇〇人を数え、市街地の大半を焼失し、開港から六〇有余年かけて築き上げた街並みは灰燼に帰した。横浜の繁栄を支え続けた横浜港も甚大な被害を受け、人口も一時四五万人から三〇万人に激減し、一部では横浜の再起を危ぶむ声も囁かれるほどであった。

しかし九月一七日には生糸貿易が再開され、横浜の政財界の有力者を網羅した横浜市復興会が発足、人びとは復興への歩みを始めた。震災の二年後から復興事業が本格化し、再建された横浜市開港記念会館、神奈川県庁、やや遅れて横浜税関の三塔が威容を現し、赤レンガ造りの町並みに替って、機能的なコンクリート建築のオフィスビル群が出現することとなった。

この間、横浜市の都市としての性格も大きく変化していった。一九二七（昭和二）年四月には、周辺の九町村を合併して市域を三・六倍に拡張したほか、臨海工業地帯を建設するために、広大な海面埋立や外防波堤が築かれた。こうして横浜は従来の生糸貿易に依存した「港都」から「工都」へと次第にその性格を変容させていく。人びとは、新しい都市へと変貌を遂げていく横浜を「大横浜」と呼んだ。

こうした街の変化をつぶさにレンズに収めた一人の人物がいた。前川謙三という写真家である。

前川については、既に本誌前号（吉田律人「写真家・前川謙三」）で詳述されているので、ここでは簡単な履歴のみを紹介しておく。一八七三（明治六）年福井県大野郡鹿谷村（現在、勝山市）に生まれ、一五歳で上京、皇室御用の写真師・丸木利陽の門をたたいた。一八九八年から四年間、最新の採光法や印画法をアメリカで勉強し、帰国。その後、丸木写真館館主代理、六桜社写真部（現在、コニカミノルタ）技師を経て、一九〇九年に横浜に前川写真館を開業した。東京美術学校（現在、東京芸術大学）や小西六写真専門学校（現在、東京工芸大学）で講師を務めるなど、その技術の高さには定評があり、横浜でも評判の写真館に成長した。

横浜市史資料室では、二〇一一年に前川謙三の孫にあたる前川淨二氏より一一四箱の木箱に納められた約四二〇〇枚に及ぶガラス乾板の寄贈を受けた。撮影年代はおおむね大正末期から昭和戦後期で、写真館のスタジオで撮影された人物写真がその大半である。このうち「大横浜」と薄く墨書された木箱には、震災直後から復興を遂げていく横浜の様子をとらえたガラス乾板約二〇〇枚が収められていた。ここでは「大横浜」を見つめ続けた写真家・前川謙三の写真から、横浜の復興過程をたどることにしたい。

罹災時の生活の記録

前川写真館は、関東大震災の直後、横浜市より依頼を受けて市内の被災状況などを一五〇枚の写真に収めた。その全貌はすでに『報告書　横浜・関東大震災の記憶』で紹介されている。写真の大半は、崩落した建築物や瓦礫と化した街並みであるが、野外・バラックでの小学校の授業風景、市電のバラック電車、露天で営業再開した店舗など、震災から数ヶ月間の罹災者の生活を撮影した写真も含まれている。

右の写真は、先の一五〇枚とは別に新たに見つかったものである。左端に「横浜市本町尋常高等小学校」との立札が見える。弁天橋そばにあった本町小学校は、地震直後に発生した火災で校舎が全焼した。このため授業再開は一二月までずれ込んだうえ、天幕での授業を余儀なくされた。

慰霊と追悼の記録

残された被災者にとって、犠牲者の追悼は再起に向けた第一歩であった。横浜では様々な追悼行事が行われた。震災から二ヶ月後に行われた県・市合同の追悼会（一一月一日　横浜公園）や、一九二四（大正一三）年九月一日の一周年慰霊祭（横浜公園）の写真は、先の一五〇枚に含まれている。

左の写真は一九二四年山手の外国人墓地で行われた慰霊祭である。左手に見える塔は、外国人震火災横死者の記念碑。神奈川県の調査によれば、横浜在留外国人の死者・行方不明者は二八九八人を数え、山手の外国人墓地も大きな被害を受けた。当時、外国人墓地管理委員会の委員長を務めていたモリソン（檀上右の人物）は、妻と息子を失う悲劇に見舞われながらも、墓地の復旧に尽力した。

このほか、一九二六年九月に開設された久保山合祀霊場の慰霊祭の様子もガラス乾板に収められている。

復興工事の記録

前川と同じく、大正後期から昭和初期にかけて活躍した横浜の写真家に、岡本三朗というカメラマンがいる。彼は前川より二四歳若く、明治末に横浜写真界の古参・玉村康三郎に入門し、一九二三年に独立してサブロの写真工場を開業した。震災の翌年に真砂町に横浜写真通信社を設立、新聞社にニュース写真を提供するなど、報道写真家として活躍した。岡本は前川の主宰する同業者の研究会（親光会）に参加するなど、前川とは深い関係にあった。

岡本の作品は、関東大震災発生直後に屋根の上を逃げ惑う人々の様子をとらえた著名な写真に代表されるように、ニュース性の強い、躍動感溢れる被写体が特徴である。それに比べると、前川の写真は静態的で、震災後の被災状況や、一連の関連行事を淡々と記録する立場に徹しているようにも思える。

横浜の復興事業は一九二五年頃から本格化するが、前川は復興工事の様子も記録していた。紅蘭女学校（現在、横浜雙葉学園）の写真が六枚あり、改築工事を請け負った宮田事務所から依頼を受けて撮影したものである。

このほか、解体工事中の中央電話局、竣工間近の加賀町警察、堀川の護岸工事、羽衣橋の開橋式、横浜小学校の新築落成記念の写真などがある。

変わり行く町並みの記録

前川謙三のレンズは、以上のようなミクロな復興状況ばかりでなく、震災後に新しい都市へと生まれ変わっていく横浜の全貌をとらえていた。彼は、横浜の市街地（関内および旧吉田新田一帯）を俯瞰できる三つの丘、すなわち野毛山・三春台・山手の三地点に立ち、市中を見渡すパノラマ写真を、ほぼ一年おきに撮影していたのである。左頁の四枚は、山手の谷戸坂から山下町一帯を見下ろした写真である。

横浜の復興事業は一九二九（昭和四）年に終了し、四月二三日に昭和天皇が行幸、翌日復興祝賀式が挙行された。一連の行事は岡本三朗が中心となって記録写真が残されたが、前川もこれに参加、復興が完成した市内の街並みや、天皇への献上品などを撮影している。

前川謙三は、まさしく「大横浜」を記録した写真家であったと言えよう。

（松本洋幸）

1925年　手前を流れる堀川の護岸は所々崩落の跡が見える。右端の橋は山下橋、その左下が谷戸橋。谷戸橋の脇には地震で倒壊したグランドホテルの煙突が残る。中央やや左の大きな建物はテントホテルで、その左側には急造のプレハブの建物群、クラブホテルなどが並ぶ。

1926年　堀川の護岸が整備され、左端には工事中の谷戸橋が見える。海岸部では山下公園の埋立が始まっているほか、工事中のホテル・ニューグランドも見える。また山下町内には、外国人商店なども開業し、商業活動が開始されつつある。

1927年12月　谷戸橋の付け替え作業が終わり、堀川にも艀船の姿が見られるようになった。工事中の山下公園では植栽が始まったほか、中央に開業したホテル・ニューグランド、遠景には新築工事中の三代目の神奈川県庁舎、その左に開港記念会館も見える。

1928年　山下公園の整備がさらに進み、左端には三代目県庁舎のキングの塔がその威容を現している。山下町の区画整理事業は永代借地権などの問題から遅滞していたが、この頃にはようやく工事が佳境に差し掛かりつつある様子がわかる。